

かた せ ばる い せき
片瀬原遺跡

特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



片瀬原遺跡全景（東より）

2008

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

宮崎市教育委員会では、特別養護老人ホーム「松見園」建設に伴い、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原に所在する片瀬原遺跡の発掘調査を行いました。

今回の調査面積は60m²ではありますが、竪穴住居跡が6棟検出され石崎川右岸で集落が存在していた事が分かりました。遺跡近くを流れる石崎川の両岸には弥生時代の集落である下那珂遺跡、中溝遺跡などが存在し、古来より石崎川の近くで人々が暮らしていた情景が思い起こされます。

今後、本報告書が地域史解明の一助となり活用されますと共に、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成20年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田原健二

例　　言

1. 本書は、特別養護老人ホーム松晃園移転に伴う片瀬原遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成19年6月4日から平成19年6月22日までの期間実施した。また整理作業は、平成19年9月19日から平成20年3月31日までの期間実施した。
3. 発掘調査によって出土した遺物及び調査における図面・写真等は、宮崎市教育委員会で保管している。

4. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会
文化振興課	課長 野田清孝
調査総括	主幹兼文化財係長 山山 典嗣
調査事務	主任上事 吉永 大介
調査担当	技師 河野 雅人
補助員	嘱託 永友 加奈子 嘱託 徳丸 理奈

5. 本書で使用した遺構略号は、以下の通りである。
SA：竪穴住居跡 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：ピット
6. 現場及び遺物の写真撮影は、河野が行った。
7. 現地での写真撮影等の記録は主に河野が行った。その他、発掘調査期間中に多くの文化振興課職員・調査員が遺構実測に加わった。実測者は以下の通りである。
稻岡洋道・井上誠二・金丸武司・竹中克繁・藤木晶子（五十音順）
8. 揭載した図面のうち、遺物の実測は河野・永友・徳丸が整理作業員とともに行った。
9. 本書の執筆・編集は河野が行った。
10. 出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第I章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の位置と環境	1
第II章 調査経過	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 当該地における埋蔵文化財の取り扱い	4
第3節 調査の経過	4
第III章 調査の成果	
第1節 基本層序	6
第2節 調査の記録	6
第IV章 まとめ	17

挿図目次

第1図 周辺地図①	2
第2図 周辺地図②	3
第3図 片瀬原遺跡・遺構配置図	5
第4図 1号堅穴住居跡（S A 1）実測図	6
第5図 2・3・4号堅穴住居跡及び4号土坑（S A 2・3・4、S C 4）実測図	7
第6図 2・3・4号堅穴住居跡（S A 2・3・4）上層断面図	8
第7図 4号土坑（S C 4）実測図及び土層断面図	8
第8図 3号堅穴住居跡（S A 3）埋甕平面図及び見通し断面図	9
第9図 5号堅穴住居跡（S A 5）実測図	9
第10図 6号堅穴住居跡（S A 6）実測図	10
第11図 片瀬原遺跡出土遺物実測図①	12
第12図 片瀬原遺跡出土遺物実測図②	14

図版目次

図版 1～4 現場調査	18
図版 5～26 遺物写真	20

表目次

表1 片瀬原遺跡出土上器観察表	15
表2 片瀬原遺跡出土土器観察表	15
表3 片瀬原遺跡石器及び土錐計測	16

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

片瀬原遺跡は、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原に所在し、石崎川右岸の標高約11mに位置する。片瀬原遺跡が所在するこの地域一体は宮崎平野の一部であり、この平野は沖積低地と丘陵から形成されている。沖積低地は下田島面群と呼ばれる完新世段丘面、砂堤、砂丘、氾濫原などから構成され、下田島面群は海成で高位からⅠ～Ⅳ面に分かれている。

片瀬原遺跡はこの下田島Ⅰ面上に立地し、南西約200mの地点には西片瀬原遺跡（弥生時代後期後半）が所在する。この遺跡では袋状口縁壺形土器が出土している。また、周辺には中溝遺跡（弥生時代）、下ノ山遺跡（弥生時代～中世）、下山遺跡（古代～中世）、伊賀給遺跡（弥生時代～中世）が所在する。中溝遺跡では堅穴住居跡1・土坑1が検出され、弥生時代後期初頭の上器が出土している。胴部に一条の突帯を施し、底部が上げ底になる中溝式と標識設定されているものである。また、伊賀給遺跡では弥生時代～中世の水田跡が検出されている。

石崎川左岸の城ヶ峰台地には下那珂貝塚（繩文～弥生）、下那珂遺跡（旧石器～弥生）、広瀬城ヶ峰横穴群（古墳時代後期）が所在する。下那珂貝塚は昭和42年に飛鳥の文様が描かれた弥生土器が発見されている。下那珂遺跡は平成11年から平成13年にかけて三次の調査が行われ、丘陵上に弥生時代後期から終末期の堅穴住居跡が120軒検出され、鹿籠文鏡片が出土している。また、県内ではトップクラスの石包丁の出土数を誇る。

城ヶ峰台地の北方には土器田横穴群（古墳時代）や小牧遺跡（中世～近世）が所在する。土器田横穴群は計7基の横穴が調査され、その内上器田東1号横穴墓の玄室では線刻壺面が描かれ奥壁には、イルカなどの線刻とその下部に連続三角文が線刻され、内部に朱痕が見つかっている。

城ヶ峰台地の西の丘陵には、下那珂馬場古墳（古墳時代）・堤下遺跡（弥生時代）が所在する。堤下遺跡では周溝状造構が検出されており、弥生時代の祭祀の場と想定されている。

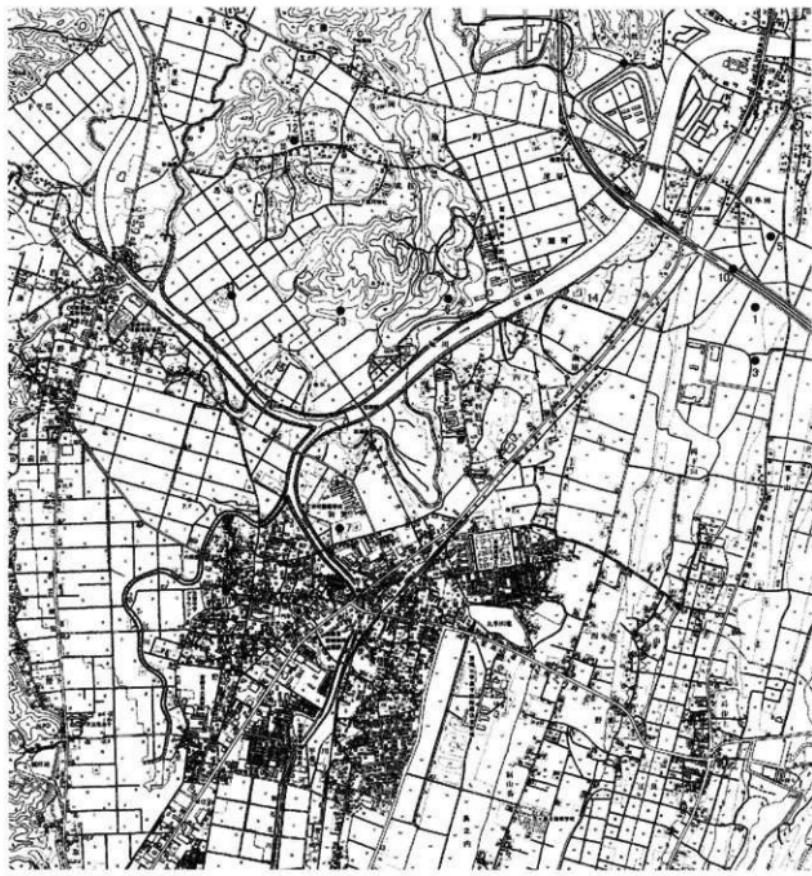
片瀬原遺跡の南西には、保木下遺跡（弥生時代～中世）・住吉古墳群（古墳時代）が所在する。住吉古墳群は前方後円墳が3基確認されていたが、現在は住吉1号墳のみが現存している。

このように、片瀬原遺跡の周辺には弥生時代以降の遺跡が多く存在する。弥生時代には周辺の標高の低い地域は離水し湿地となっていたと想定され、それを生産基盤としていた集団の存在を思い起させる。

なお、宮崎県史 資料編 考古2において紹介されている西片瀬原遺跡は、佐土原町遺跡詳細分布調査報告書では片瀬原遺跡の範域に含まれており、周辺地図では片瀬原遺跡として取り扱う。

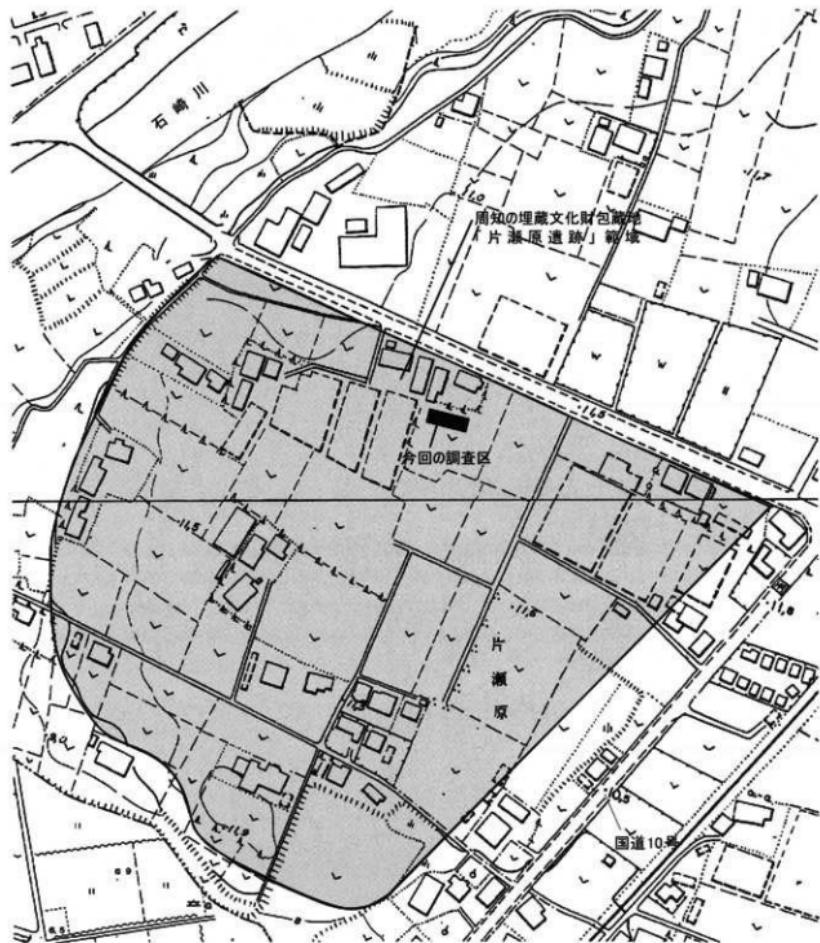
【参考文献】

- 宮崎県『宮崎県史』 資料編 考古1 1989
- 宮崎県『宮崎県史』 資料編 考古2 1993
- 宮崎県『宮崎県史』 通史編 原始・古代1 1998
- 宮崎県埋蔵文化財センター 「下那珂遺跡」 『県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第90集』 2004



第1図 周辺地図① ($S = 1/20,000$)

- | | | |
|----------|-------------|-------------|
| 1. 下之山遺跡 | 6. 下那珂遺跡 | 11. 住吉古墳群 |
| 2. 小牧遺跡 | 7. 保木下遺跡 | 12. 下那珂馬場古墳 |
| 3. 下山遺跡 | 8. 土器田横穴群 | 13. 下那珂貝塚 |
| 4. 堤下遺跡 | 9. 広瀬城ヶ峰横穴群 | 14. 片瀬原遺跡 |
| 5. 伊賀給遺跡 | 10. 中溝遺跡 | |



第2図 周辺地図② (S=1/2,000)

第Ⅱ章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成18年12月6日、社会福祉法人一寿会理事長[REDACTED]より特別養護老人ホーム建設に伴い、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原における埋蔵文化財の有無について、宮崎市教育委員会教育長宛に照会がなされた。当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である「片瀬原遺跡」が所在するため、平成18年12月22日（金）～平成19年1月11日（木）に掛けて確認調査を実施した（計8日間）。調査は、バックホーを使用し計21本の確認トレシチを設定した。結果はその内容から北区、南区、東区に分けられる。北区では溝跡・ピットが検出され、土師器が出土した。南区では、住居跡・ピットが検出され、須恵器・土師器が出土した。東区では遺構・遺物は確認されていない。

この結果に基づき、宮崎市教育委員会では社会福祉法人一寿会と協議を重ね、再度地下浄化槽にかかる部分の確認調査を実施した。結果、住居跡・ピットが確認されたため、再び社会福祉法人一寿会と協議を行い地下浄化槽部分60m²を対象として本調査を行うこととした。

第2節 当該地における埋蔵文化財の取り扱い

周知の埋蔵文化財包蔵地である「片瀬原遺跡」は、現在、畑地や宅地として利用されている標高約12m前後の冲積低地に所在する。事業対象地を便宜上、北区、南区及び東区と分割し事前に確認調査を実施した結果、北区及び南区では遺構・遺物が確認され、東区では剖面により文化財は確認されなかった。その後協議の末、現状保存箇所と発掘調査実施箇所を設け、遺物包含層・遺構面に達する地下浄化槽部分を現地における発掘調査の対象とし、記録保存を行った。

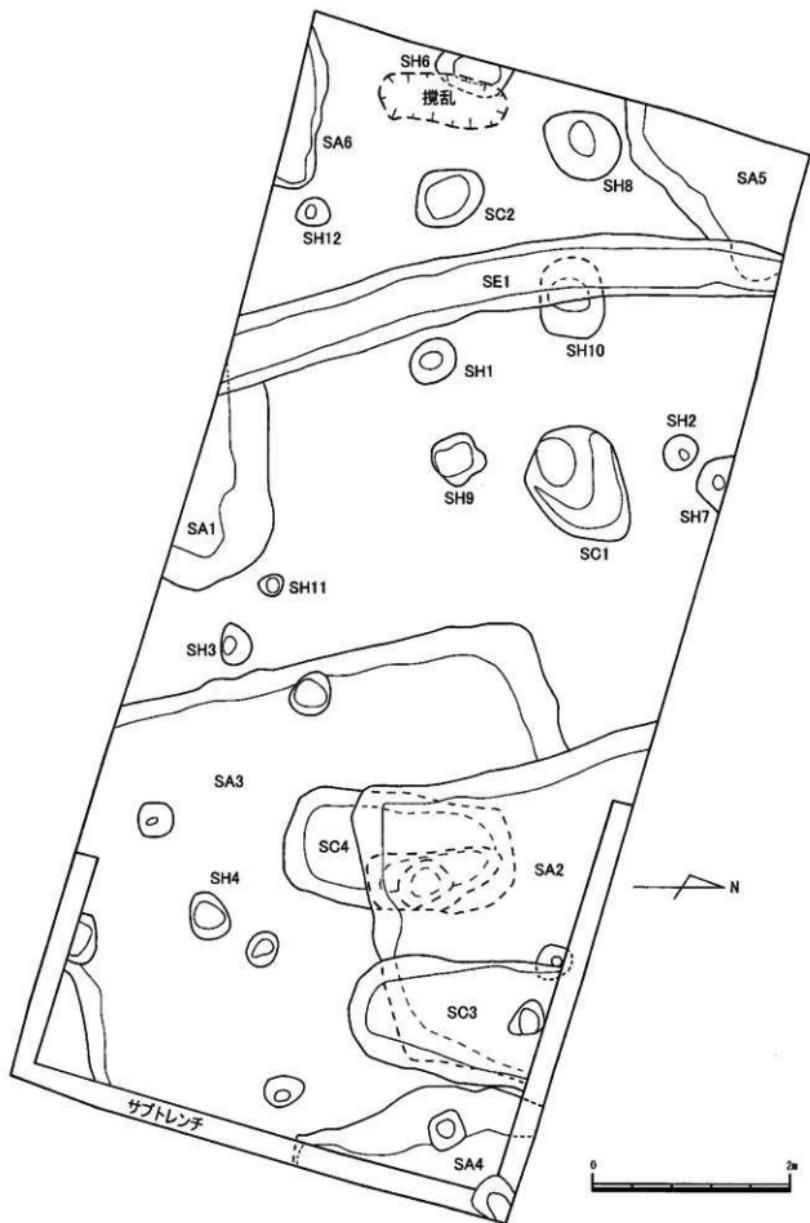
第3節 調査の経過

片瀬原遺跡は、もともとは畑地であったが、調査時は雑草の繁茂する荒蕪地であった。平成19年4月25日に行った確認調査の結果、住居跡・ピットが検出された。

調査は、地表面より1m以上掘り下げた状態で行った。砂地であったため水はけは良かったものの、それ以上に乾燥が激しく水を撒きながらの遺構検出・調査となつた。また、埋土が近似している堅穴住居跡が切りあっており、検出は困難であった。

調査の結果、堅穴住居跡6軒・土坑2基・溝状遺構1条・ピット22基が検出された。調査区西側で検出されたピットの内2基は当初上坑と考えていたが、ピットとの位置関係を考えた場合ほぼ等間隔に位置しており塔立柱建物の可能性があるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

現地調査終了後、整理作業は、平成19年9月19日から平成20年3月31日までの期間実施した。



第3図 片瀬原遺跡・造構配置図 ($S = 1/50$)

第III章 調査の成果

第1節 基本層序

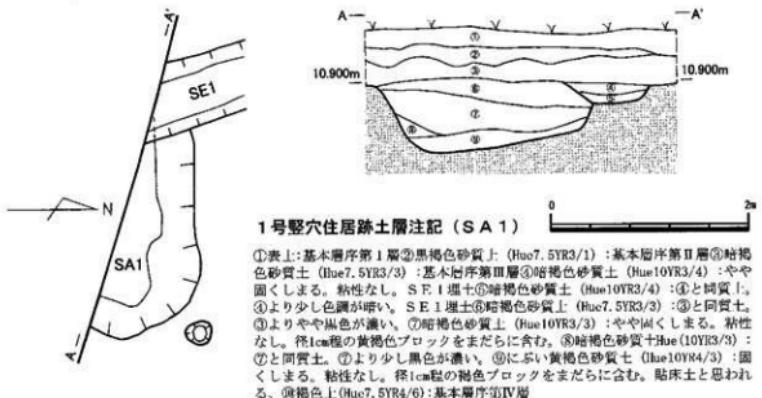
片瀬原遺跡における基本層序は、I層表上 (20 cm 遺物番号15)、II層黒褐色砂質土 (10~15 cm やや固くしまる 粘性弱 高原スコリアをまだらに含む トランクターによる攪拌が激しい 遺物番号16~33)、III層暗褐色砂質土 (15 cm やや固くしまる 粘性なし 遺物番号34~48)、IV層褐色砂質土 (15 cm やや固くしまる 粘性なし)、V層青灰色砂 (15 cm以上 固くしまる 粘性なし) となり、I・II層が客土、III層が遺物包含層、IV層が遺構検出面である。

第2節 調査の記録

造構について

1号堅穴住居跡

調査区のほぼ中央南端に位置する。北東コーナーと北壁を検出したのみで、大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは最大0.7mで、青灰色砂層まで掘り込んでいる。柱穴は確認できなかった。遺物は数点が埋土中から出土したのみである。SE1に北壁を切られている。



第4図 1号堅穴住居跡 (SA 1) 実測図 ($S = 1/50$)

2号堅穴住居跡

調査区のほぼ北東に位置する。造構埋土の色調が3号堅穴住居跡と酷似していたが、南辺と西辺及び東辺の一部を検出した。北辺が調査区外のため全容は不明であるが、平面形態は南辺と西辺を基に考えると、長方形になると思われる。調査区北壁付近で焼上粒が確認できたため窓などの火処の存在も考えられたが、検出されなかった。床面では直径約20 cmのビットが2基検出されたが、深さが浅い。遺物は埋土中と床面直上から出土した。3号堅穴住居跡に構築された遺構である。

3号堅穴住居跡

調査区の東半に位置する。2号・4号堅穴住居跡及び3号土坑に切られていたが、北西コーナー・南西壁の一部・南東壁の一部を検出した。南西コーナーが調査区外にあるため、正確な平面形態・規模等は不明だが、おおよそ一辺5.6mと思われる。また、青灰色砂層まで掘り込んだ後に砂を用いて厚さ約10cmの貼床を施している。ピットは5基検出されたがいづれも深さが浅く、配置に規則性が見られない。遺物は、埋土中からと床面直上から出土した。

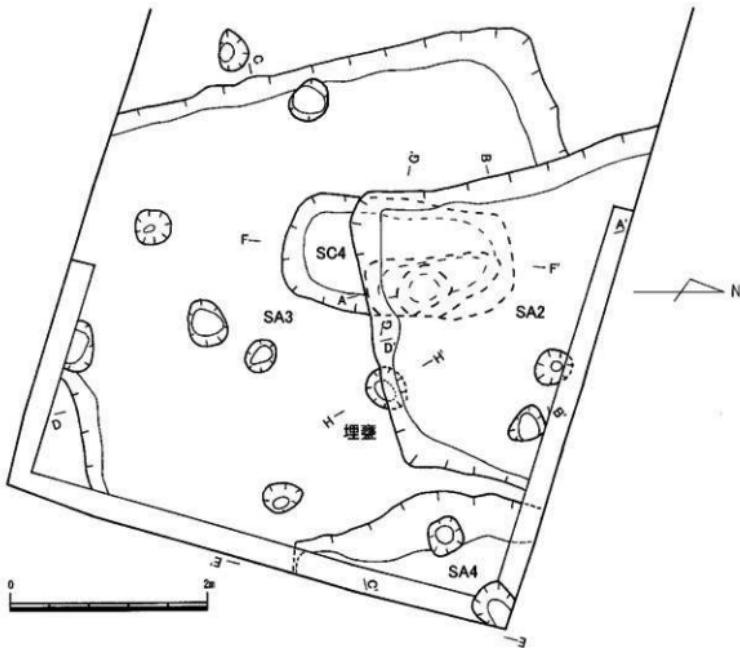
また、この3号堅穴住居跡には埋甕が付設していた。

4号堅穴住居跡

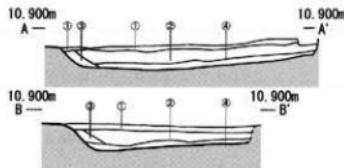
調査区北東隅に位置する。南西壁の一部と南西コーナーを検出したのみで、大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。南西壁はなだらかに下り、床には厚さ約20cmの貼床を施していた可能性も考えられる。遺物は出土していない。ピットを2基検出し、調査区の北東角のピットは深さ約80cmだった。ピット内から遺物は出土していない。

4号土坑

規模は2.4×1.2m、深さ0.2mで上層に遺物を多く含んでいたが、下層に向かうに従い出土しなくなった。掘り込みは浅く出土した土器も破片が多い。3号堅穴住居跡の貼床面から掘り込んでいるため、住居廃絶後に掘られたものと思われる。

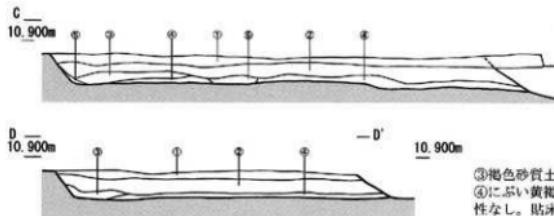


第5図 2・3・4号堅穴住居跡及び4号土坑(SA 2・3・4, SC 4)実測図 (S = 1/50)



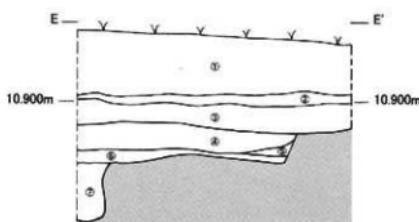
2号竪穴住居跡土層注記(SA 2)

- ①暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3) : やや固くしまる。粘性なし。
②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : やや固くしまる。粘性なし。
③径5mm程の黄褐色ブロックをまだらに含む。
④暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : ②と同質土。②よりやや黒色が濃い。
⑤黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/2) : やや固くしまる。粘性なし。



3号竪穴住居跡土層注記(SA 3)

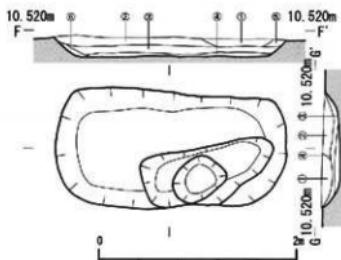
- ①暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : やや固くしまる。粘性なし。
②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : ①と同質土。①よりやや黄色味がある。



4号竪穴住居跡土層注記(SA 4)

- ①表土: 基本層序第1層②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3) : やや固くしまる。粘性なし。
③にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR4/3) : やや固くしまる。粘性なし。貼床土④暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : やや固くしまる。粘性なし。
⑤暗褐色砂質土(Hue10YR3/3) : やや固くしまる。粘性なし。
⑥暗褐色砂質土(Hue7.5YR4/3) : やや固くしまる。粘性なし。
⑦暗褐色砂質土(Hue10YR3/4) : やや固くしまる。粘性なし。

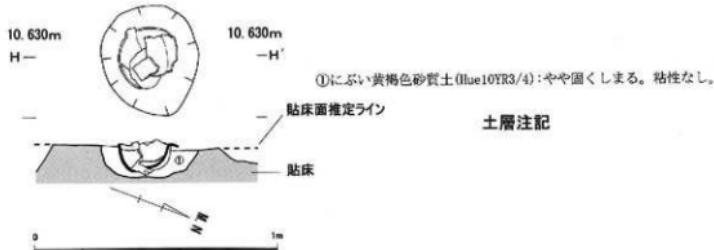
第6図 2・3・4号竪穴住居跡(SA 2・3・4)・土層断面図 (S = 1/50)



4号土坑土層注記(SD 1)

- ①黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/1) : やや固くしまる。粘性なし。炭化物をまだらに含む。
②褐色砂質土(Hue7.5YR4/3) : やや固くしまる。粘性なし。
③褐色砂質土(Hue7.5YR4/3) : ②と同質土。②よりやや黒色が濃い。
④にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR4/3) : やや固くしまる。粘性なし。
⑤暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4) : やや固くしまる。粘性なし。
⑥暗褐色砂質土(Hue10YR3/3) : やや固くしまる。粘性なし。

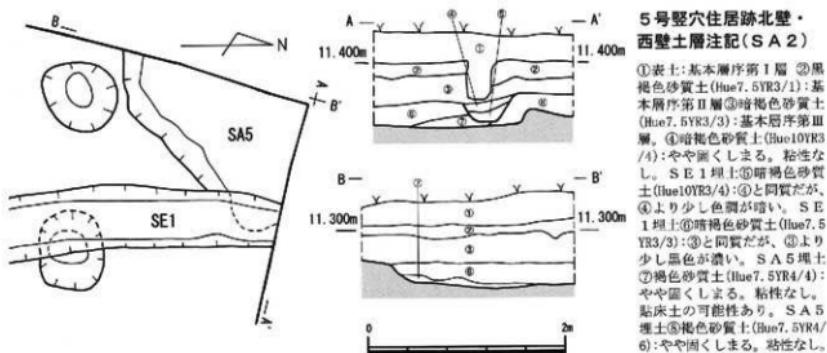
第7図 4号土坑(SC 4)実測図及び土層断面図 (S = 1/50)



第8図 3号竖穴住居跡(SA 3)埋甌平面図及び見通し断面図 (S = 1/20)

5号竖穴住居跡

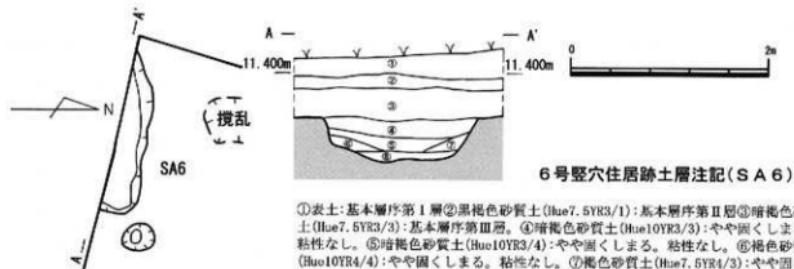
調査区の北西隅に位置する。1号溝に切られている。南西コーナーと南東壁の一部を検出したのみで大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは0.2~0.25mで比較的掘り込みは浅かったが、床面が平らであったため住居跡とした。柱穴は検出されていない。遺物も出土していない。



第9図 5号竖穴住居跡(SA 5)実測図 (S = 1/50)

6号竖穴住居跡

調査区の南西隅に位置する。北東コーナーと北壁の一部が検出されたのみで、大部分は調査区外に延びております。平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは0.4mで青灰色砂層まで掘り込んでおり、その上に厚さ5~10cmの貼床を施している。柱穴は検出されていない。遺物も出土していない。



第10図 6号竪穴住居跡(SA6)実測図 (S=1/50)

1号溝

調査区の西半に位置し、北西から南東方向に延びる。1号及び5号竪穴住居跡を切っている。検出面での幅は0.60~0.69m、深さ0.21~0.37mで、遺物は小片数点が埋土中から出土したのみである。

1号土坑

調査区の西半に位置する。遺物は出土していない。規模は1.3m×0.95m、深さ0.5mで、当初は土坑と判断したが、SH18、SH10と一列に並ぶことから、掘立柱建物跡が想定されるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

2号土坑

調査区の西半に位置する。遺物は出土していない。規模は0.7m×0.6m、深さ0.2mで、当初は土坑と判断したが、SH1、SH6と一列に並ぶことから、掘立柱建物跡が想定されるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

3号土坑

調査区の北東隅に位置する。検出層位が違うため他の遺構と時期が異なると思われる。埋土からは土師器、須恵器、炭化物が多数出土した。下層に向かうに従い出土遺物は少なくなり、細片であった。

ピット(1~12)

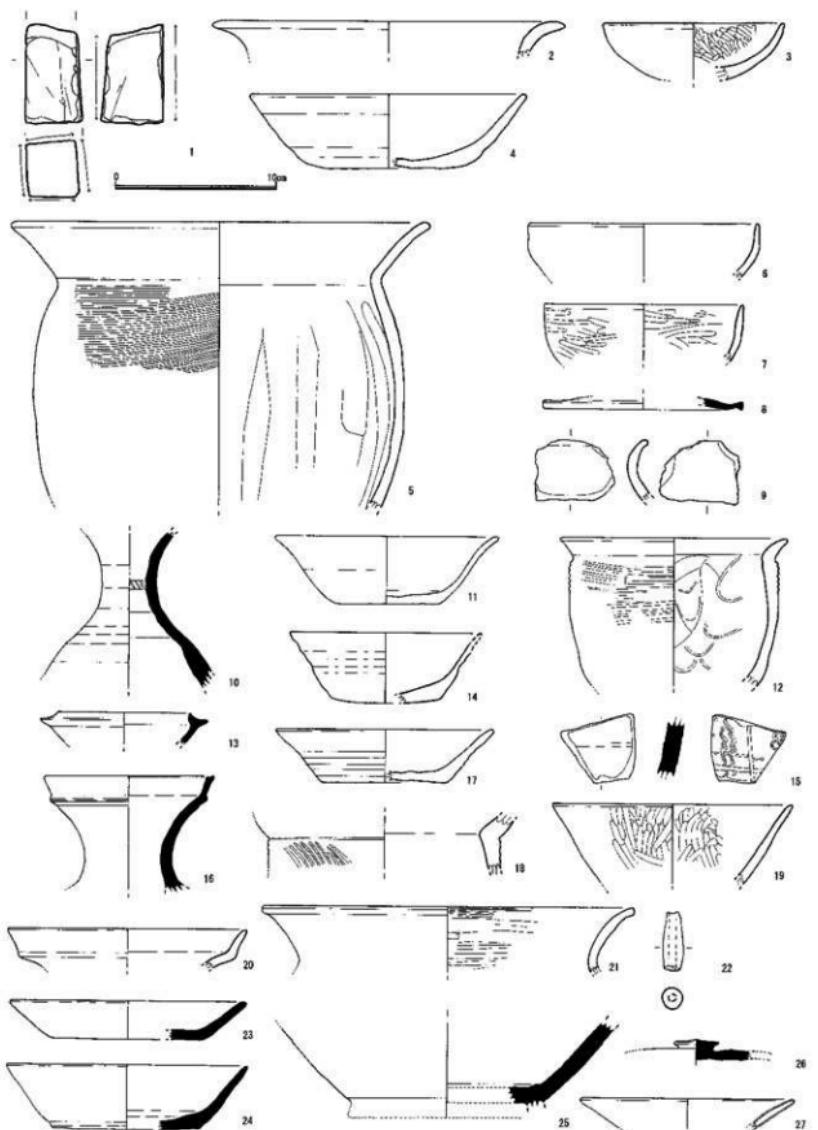
遺物が出土したのは、4号ピットのみであり、竪穴住居跡に伴うものではない。その他のピットから遺物は出土していない。調査区西側ではSC1・SH10・SH8とSH1・SC2・SH6が2列並び、掘立と考えられる。

遺物について

1~14は遺構出土の遺物である。1はSA 1出土の砥石である。両端が欠損しているが、残存する面で無数の擦り跡が4面すべてに残る。また、凹面状に隆んでいる。形状から柱状のプロポーションが想定できる。2~4はSA 2出土である。2は土師器甕で胎土に小石が目立つ。内面は部分的に黒変している。3は土師器甕で外面はナデであるが、内面に細かく丁寧なミガキを施している。4は土師器甕で内外面ともが風化しているが、底面でヘラ切り痕跡が確認でき、若干上げ底になっている。また、底面から胴部への立ち上がる部分で全削ると思われる若干の座みを施している。5~9はSA 3出土である。5は土師器甕で埋甕として使用されていた。外面はハケ目を施した後に丁寧なナデを行っている。一方で内面は縦方向のケズリを行って整えている。胴部下位から底部を打ち欠き、口縁から胴部上位を残して使用している。埋甕に使用されていたと思われるが、内外両面に煤の付着はない。6、7は土師器甕である。6は内外面をナデしているだけだが、7は内外面共に丁寧なミガキを施す。8は須恵器の外蓋でかえり手前で一旦窪んだあと、端部を下方に折り曲げてつまんでいる。また、器壁は薄く天井部にはふくらみはないと思われる。9は土師器甕で内外面の調整はナデである。胎土で小石が目立つ。10~12はSC 3出土である。10は須恵器の長頸甕で焼成は良く、口縁部近くに自然釉がかかっている。11は土師器甕で内外面の調整はナデである。底面はヘラ切りで、ロクロを使用したと思われる。12は土師器の小型甕で風化しているものの、横方向のハケ目が施されている。胎土には小石が目立ち、粘土の継ぎ目も確認できる。また、煤が部分的に付着している。口縁部の調整は丁寧である。13・14はSC 4出土である。13は須恵器の坏身で部分的に自然釉がかかる。また、内面の底部からたちあがりへの変化部分に沈線を施している。器壁も薄く、口径も推定8.2cmで小型である。中村編年II-6型式か。14は土師器甕で、胴部の一部をケズリによって調整していると思われる。風化によりはっきりとは確認できないが、ヘラ切り底と思われる。

15はI層出土の須恵器で、破片のため器種は不明だが、沈線、波状文、刺突文を施しており、類例を見ない調整である。

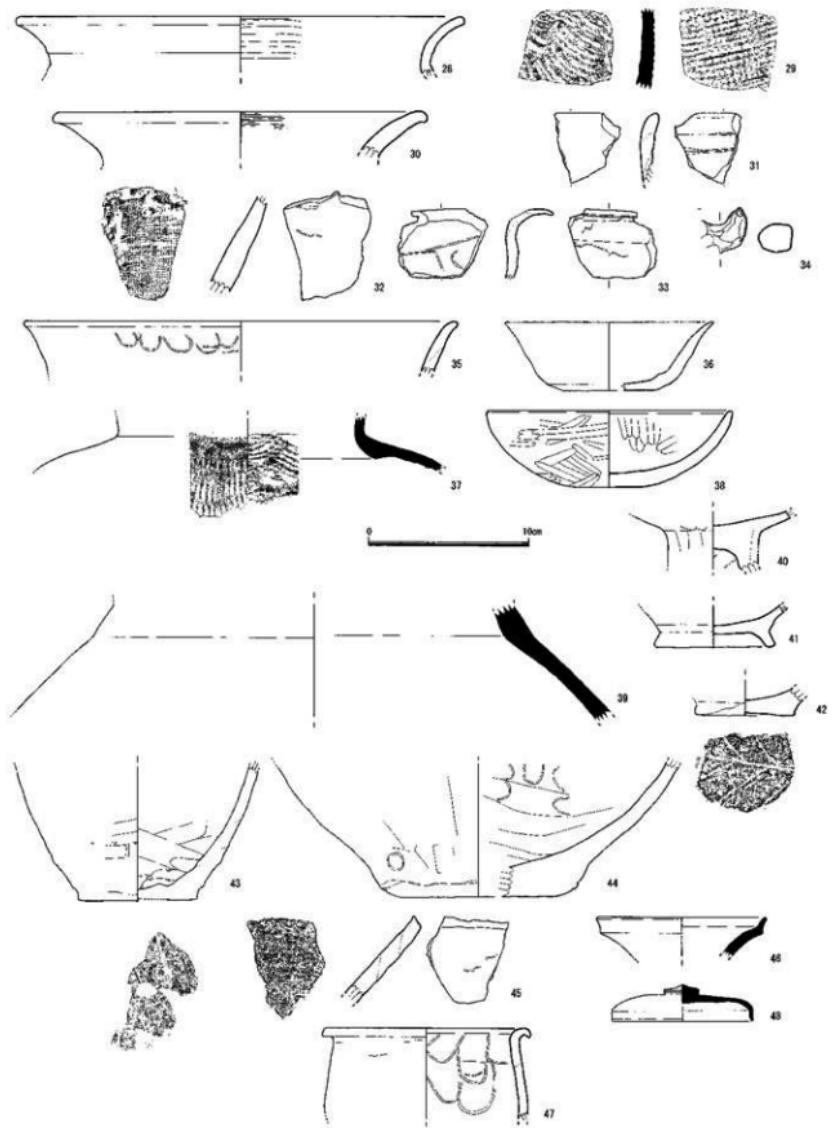
16~33はII層出土である。16は須恵器の長頸甕で焼成は良く、口縁部に沈線を施す特徴を持つ。比較的大型の長頸甕である。17は土師器甕で表面は風化しているものの、外面では横ナデを確認できるがケズリを施している可能性もある。また、底面はヘラ切りで中央部に向かって若干窪んでおり、上げ底となっている。18は土師器甕で頸部しか残っていないものの、外面の頸部から胴部には斜方向の沈線、頸部には横方向の沈線を施している。また、胎土は当遺跡より出土した他の土師器と比較すると違いが見られる。19は土師器甕で、内外面に丁寧で細かいミガキを施している。また、内面は黒変しており、内黒であろう。20は土師器甕と思われる。一部に煤が付着している。21は土師器甕で、外面の口縁部直下を若干削ませている。内面にはハケ目が確認できる。22は筒型の土鍤で、穿孔を施した一方の面を平らに整えている。また、中央部が若干膨らむプロポーションである。23は須恵器皿と思われ、内外面で色調に違いが見られる。24は須恵器甕で、風化しているが内外面の調整はナデである。また、底面はヘラ切りである。外面の色調が白っぽく、生焼けの須恵器ではないかと思われる。25は須恵器高台付甕であるが、高台部を欠損している。自然釉が全体にかかっていたと思われるが、磨耗のためか底部と高台部の結合部分付近に見られるだけである。26は須恵器の坏蓋で天井部である。つまみ中央部が若干膨らんでいる。27は青磁の鉢である。28は土師器甕で内面にハケ目を施した後、ケズリをしていると思われる。また、外面の頸部に沈線を施している。29は須恵器甕である。



第11図 片瀬原遺跡出土遺物実測図① (S = 1 / 3)

外面はタタキで一般的な格子文であるが、内面の當て具痕は縄目の様な文様である。30は土師器甕で器壁が厚い。外面の調整はナデであるが、内面はハケ目を施したのちナデしている。31は土師器甕であるが、粘土繼ぎ目がはっきりと確認できる。長時間被熱を受けたためか、土器内部まで赤変している。32は上師器鉢で製塙土器である。外面は風化しているものの、内面には布痕がはっきりと残っている。土器自体の作りにも難しさが目立つ。33は土師器甕で胎土に小石が目立つ。また、厚みも他のものと比較すると少し薄い。

34～48はⅢ層出土である。34は土師甕の把手である。牛角把手と言われるものである。35は土師器甕で、外面の一部と内面には煤が付着している。36は土師器壺である。外面は風化しているものの底面から頸部への立ち上がる部分で全周するとと思われる若干の窪みを施しているのが確認出来る。また、底面はヘラ切りである。37は須恵器甕で、内面で粘土繼ぎ目を確認出来る。外面はタタキののちナデを施す。38は土師器碗である。焼成は良く内外面とも細かく丁寧なミガキを施し、光沢を放つ。39は須恵器大型甕で、外面には自然釉がかかる。また、内面には當て具痕は見られず、横ナデで頸部では光沢を放つ。40は土師器の高壺で壺受けの部分のみである。外面は工具によるナデを施している。内面はミガいてあるがミガキの痕跡はよくわからない。また、内面は部分的に黒変している。粘土の窪みもはっきりと観察出来る。41は上師器碗で高台と底部しか残存していないが、丁寧なつくりで高台部を貼り付けた痕跡が確認できる。高台部は丁寧な回転ナデを施し、高台部の高さは0.9cmである。外面には煤が付着している箇所もあり、内面は黒変しみがいてあるがミガキの痕跡はよくわからない。内黒と呼ばれるものである。42は土師器甕で底部のみ残存している。底面は木葉痕で、葉脈も確認出来る。43・44は土師器甕である。43・44は頸部から底部であり底面は木葉痕が見られる。43は粘土繼ぎ目と粘土のダレが確認できる。43は小型だが、44は大型で器壁も厚い。内面は黒変している。45は土師器鉢で製塙土器である。内外面ともに風化しているが、内面には布痕が残っている。46は須恵器甕で口縁部から頸部の残存である。内面には灰がかぶる。47は土師器甕で胎土に小石が目立つ。意図的かは不明であるが、口縁部の一部が下方に折れ曲がっている。粘土繼ぎ目と粘土のダレが確認できる。48は須恵器の蓋で天井から口縁部が残る。つまみは貼り付けてあり、中央が若干膨らむ。口径も10cm程度と小さく器壁も薄い。蓋の蓋と思われる。



第12図 片瀬原遺跡出土遺物実測図② (S = 1 / 3)

表1 片瀬原遺跡出土土器観察表

番号	種別	部位	出土地点	法儀			手法・脚法・文様ほか		色調		出土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外腹	内腹	外腹	内腹		
2	土師器底	口縁 ～腹部	SA2	20.8			横ナデ	横ナデ	緑	にぶい緑	1mm以下の黒色細鉢紋が多く含まれている。1mm程の無色透明の光沢感もわずかに見られる。	
3	土師器底	口縁 ～腹部	SA2	11			ナデ	ヒガキ	緑	緑		
4	土師器底	口縁 ～腹部	SA2	17	7.4	4.6	回転ナデ	回転ナデ	緑	緑	黒色や暗褐色の微細な妙絵を含んでいる	へう切り底
5	土師器底	口縁 ～腹部	SA3	25.4			ハケメ ナデ	回転・ケズリ 口縫部・ナデ	緑	緑	1mm大の小石を含む	縫目
6	土師器底	口縁 ～腹部	SA3	14			横ナデ？	横ナデ？	黄緑	黄緑	精良	
7	土師器底	口縁 ～腹部	SA3	12.3			横ナデ ヒガキ	ヒガキ	淡黄緑	緑	1mm大の白色不透明の植物粒をわずかに含む。暗緑～1mm大の赤褐色の岩片をわずかに含む。	
8	須恵器底	天井 ～口縫部	SA3	12.2			ナデ	ナデ	灰黄	黄緑	精良	
9	土師器底	口縁 ～腹部	SA3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	1~3mm大の赤褐色の岩片を含む	
10	須恵器 表裏兼	口縁 ～腹部	SC3				口調・粗目・横ナデ 粗目・わ方窓の名 て底のち縫ナデ	焼灰	焼灰	精良		
11	土師器底	口縁 ～腹部	SC3	13.4	6.8	4.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細な白色半透明の植物粒をわずかに含む。微細な黑色或先灰で舟往状の植物粒を複数ずつに含む。	へう切り底
12	土師器底	口縁 ～腹部	SC3	13.8			ハケメ ナデ	ナデ 指印丸え	にぶい緑	にぶい緑	4mm以下の灰白色の岩片がやや多く含む	
13	須恵器底	口縫部	SC4	8.2			横ナデ	横ナデ	焼灰	焼灰	白色の微細な植物粒を含む	部分的に自然顔がかかる
14	土師器底	口縁 ～腹部	SC4	11.9	7.5	4.7	横ナデ ケズリ	横ナデ	にぶい緑	にぶい緑	0.5~1mmの岩片を含む 3~4mmの小石を含む	表面の一側はケズリか？
15	須恵器	腹部	I				横ナデのち縫状 文・沈線・刺文文	横ナデ	焼灰	焼灰	精良	
16	須恵器長縫口	口縁 ～腹部	II	10			横ナデ	横ナデ	焼灰	焼灰	1mm程の砂を含む	口縫部に沈縫を施す
17	土師器底	口縁 ～腹部	II	13.2	7.8	3.3	横ナデ ケズリ	横ナデ	緑	緑	精良	へう切り底
18	土師器底	縫部	II				ナデ 斜方向の沈縫	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細な褐色・黃白色・半透明の粒子を含む	縫部に沈縫を施す
19	土師器底	口縁 ～腹部	II	14.7			ヒガキ	ヒガキ	にぶい黄緑	黒	1mm以下の先灰のある赤褐色・黒色岩をわずかに含む	
20	土師器底	口縁	II	14.5			回転ナデ	回転ナデ	淡黄緑	淡黄緑	微細な灰色の砂粒をわずかに含む。1mmの白色透明の植物粒を複数ずつに含む	
21	土師器底	口縫部	II	22.6			横ナデ	ハケメ ナデ	淡黄緑	緑	1~2mm大の暗褐色透明の岩片を含む	
22	須恵器底	口縁 ～腹部	II	14.4	9.4	2.4	回転ナデ	回転ナデ	灰	オーブル馬	微細～2mm大の白色砂粒を含む	
23	須恵器底	口縫部	II	15	9.1	4.0	横ナデ ケズリ	横ナデ ケズリ	灰白	灰白	精良	へう切り底
24	須恵器底	つまみ ～天井部	II				横ナデ	横ナデ	灰白	焼灰	微細な墨色斑を含む	外済に自然顔が付着している。 萬葉部欠損
25	須恵器底	脚部	II				横ナデ	横ナデ	灰白	焼灰		
26	須恵器底	つまみ ～天井部	II				横ナデ	横ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	微細な白色粒を含む	
27	青磁体	口縫部	II	12			全面施釉	全面施釉	綠灰	綠灰	微細透明・黃白色を含む	
28	土師器底	口縫部	II	27.3			横ナデ 沈縫	ハケメ ケズリ	にぶい黄緑	緑	1mm大の黑色純光沢の植物粒をわずかに含む。暗緑～3mm大の灰白・褐色の岩片を含む	

表2 片瀬原遺跡出土土器観察表

番号	種類	部位	出土地点	法量			手法・圖形・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外側	内面	外側	内面		
29	須恵器	柄部	II				タタキ ナデ	タタキ ナデ	灰	灰	焼成	内面の當て異色は 縞目の様な文様で ある
30	土師器	口縁部	II	22			横ナデ	ハケメ ナデ	にぶい灰	にぶい灰	1mm~1cmの大粒の陶色の碎片を含む 表面~2mmの大粒の灰白色の碎片をわずかに 含む	
31	土師器	口縁 ~柄部	II				ナデ	ナデ	灰	棕	1~4mmの小石を含む	
32	土師器	柄部	II				ナデ	ナデ	棕	棕	3mm程の小石を含む	板塗土器
33	土師器	口縁 ~柄部	II				ナデ	工具によるナデ 捺押さえ?	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1~4mm程の小石を含む	
34	土師器	把手	III						にぶい黄褐		4mm以下の陶色碎片を多く含む 2mm以下の 光沢透明釉をわずかに含む	
35	土師器	口縁部	III	26.7			指おさえ ナデ(ナデ ヨコ)	横ナデ	棕	にぶい棕	1~2mmの大粒の褐色、黒色、灰白色碎片を多く 含む	
36	土師器	口縁 ~底部	III	12.8	4.4	4.2	横ナデ	横ナデ	棕	棕	無規則な墨色斑を含む	
37	須恵器	頂 ~底部	III				指おさえ一部 ナデ 捺押・タタキ	捺押・横ナデ ナデ 捺押・タタキ	灰オーリーブ	灰オーリーブ	焼成	
38	土師器	口縁 ~底部	III	15.1	3.6	4.8	ミガキ	ミガキ	棕	棕	粗糲	
39	須恵器	頂~底部	III				タタキ	横ナデ	灰	灰	無端~1mm程の墨色斑を含む	自然釉がかかる
40	土師器	脚部	III				工具によるナデ	ミガキ	にぶい黄褐	黑	2mm以下の暗赤褐色 1mm以下の墨色斑を多く含む	
41	土師器	底部	III		6.8		回転ナデ	ミガキ	にぶい黄褐	黑	1mm以下の光沢透明釉、黒色斑をわずかに 含む	底面回転ナデ 貼り付け高台
42	土師器	底部	III		6.2		ナデ	ナデ	棕	黑	1mmの大粒の墨色斑を多く含む 1mm以下の墨色斑を含む	木炭痕
43	土師器	頂 ~底部	III		7.4		ナデ	ナデ	棕	墨	にぶい黄褐 黑	3~4mmの大粒の褐色、黒色の碎片を含む 1mmの大粒の透明釉を含む
44	土師器	頂 ~底部	III		9.2		ナデ 一體ケズリ 捺押さえ	捺押さえ 横ナデ	にぶい棕	黑褐	1~5mm程の小石を含む	木炭痕
45	土師器	口縁 ~柄部	III				指おさえ	布食	棕	灰 黑	1~3mmの大粒の碎片を含む	板塗土器
46	須恵器	口縁 ~頂部	III	10.4			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰白 明黄褐 灰オーリーブ	焼成	内面:灰かぶり
47	土師器	口縁 ~頂部	III	12.6			ナデ	捺押さえ ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1~4mm程の茶褐色の小石を含む	
48	須恵器	天井 ~口縁部	III	8.8	2.3		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	焼成	つまみ縫 貼り付け

表3 片瀬原遺跡石器及び土錘計測表

番号	器種	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	砥石	SA1	6.2	3.5	3.8	135.4
22	土錘	II	3.7	1.3	1.3	3.95

第IV章　まとめ

今回の発掘調査では、堅穴住居跡6軒、土坑2基、溝状遺構1条、ピット22基が検出された。60m²という限られた面積であったため、堅穴住居跡全体を検出し全埋することができなかつたが、石崎川右岸の砂丘上に集落跡が存在していたことが確認された。

堅穴住居跡6軒のうち、調査区西側で検出された3軒では切り合いが見られなかつたが、調査区東側では3軒の堅穴住居跡が切り合つておらず、建て替えが行われたことを示している。土層断面図からは貼床を施していた痕跡も認められた。

堅穴住居跡の中には、遺物が伴わなかつたり、細片の出土で造構年代を特定できないものもある。一方、2号堅穴住居跡・3号堅穴住居跡では埋土中から多くの土器が出土しており、他の住居跡とは違いが見られる。その中で3号堅穴住居跡では埋甕に使用された土器が出土した。埋甕として使用された土器は、北中遺跡Ⅲ・7号住居跡の埋甕で使用された土師器甕と同様の型態から、概ね9世紀前半と思われる。

2号堅穴住居跡・3号堅穴住居跡とも床面直上で出土した遺物がそれほど多くなく、埋土中からは破片が多く出土した。廃絶後、意図的に埋めたものか。それらと比較して床面直上や埋土中に遺物を伴わない住居跡は、その理巾として再利用可能な土器を持ち出したとも考えられるが、調査区外に大部分が延伸しており完備できていないため詳細は不明である。

また、3号土坑は検出面の高さが他の遺構とは違うため時期に若干の差があると思われるが、出土した土師器甕の型態から概ね9世紀後半と思われる。住居の構築順序は切り合いの関係から、3号堅穴住居跡→2号堅穴住居跡→4号堅穴住居跡となり3号堅穴住居跡の埋甕で使用されていた土師器甕の特徴から9世紀前半以降の構築と考えられる。3号土坑を9世紀後半と位置付けると、それらは比較的の短期間で構築・廃絶・埋没したことになる。

堅穴住居跡からはピットが検出されたものの深さは浅く、規則性も見られないことから上屋の主柱穴にはなりえないものと思われる。3号堅穴住居跡のすぐ西側には直径小さいもののピットがあり、深さを考慮に入れるこれが3号堅穴住居跡の主柱穴となる可能性もある。また、砂地に営まれた住居であり住居壁は崩落を免れないと思われるが、その保護をどのように行っていたのか疑問が残る。言い換れば、もろく崩れやすい住居がゆえ短期間での構築・廃絶・埋没となったとも考えられるのではないかだろうか。砂地に営まれた集落の調査事例は少ないため、今後、同様の調査事例の増加を待ちたい。

【参考文献】

- 大川清ほか 1996 『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
中村浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版
南正覚雅士ほか 2003 『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター
竹中克繁編 2005 『桜町遺跡』 宮崎市教育委員会



図版 1 1号竪穴住居跡(SA 1)完掘状況



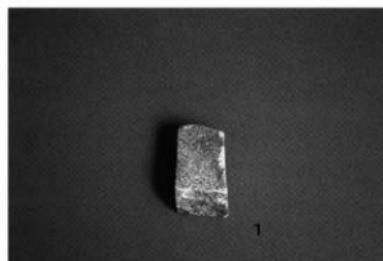
図版 2 2号竪穴住居跡(SA 2)遺物検出状況



図版3 2~4号竪穴住居跡(S A 2~4)完掘状況



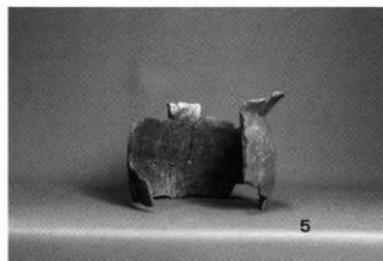
図版4 3号竪穴住居跡(S A 3)埋臺



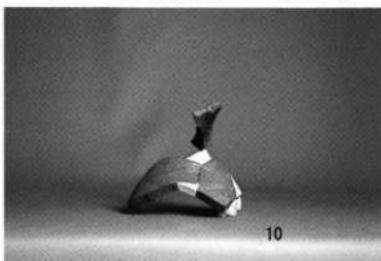
图版5 1号竖穴住居跡(S A 1)出土石器



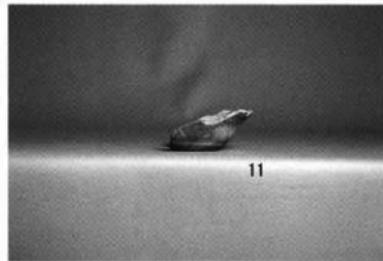
图版6 2号竖穴住居跡(S A 2)出土土器



图版7 3号竖穴住居跡(S A 3)出土土器(埋甕)



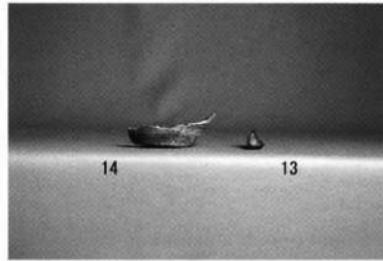
图版8 3号土坑(S C 3)出土土器



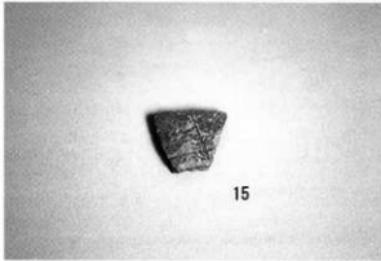
图版9 3号土坑(S C 3)出土土器



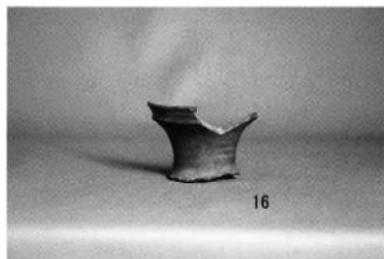
图版10 3号土坑(S C 3)出土土器



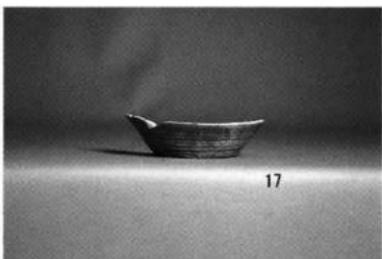
图版11 4号土坑(S C 4)出土土器



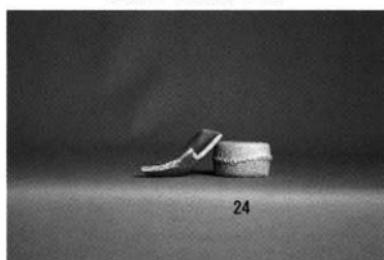
图版12 I层出土土器



图版13 II层出土土器



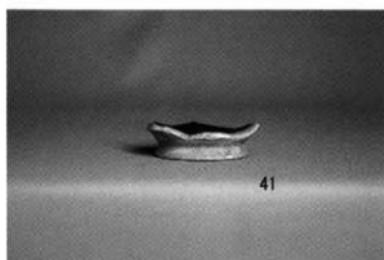
图版14 II层出土土器



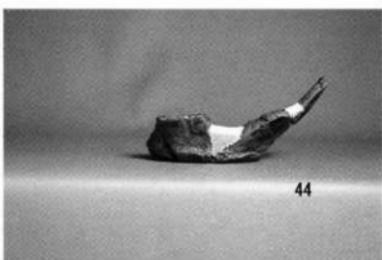
图版15 II层出土土器



图版16 III层出土土器



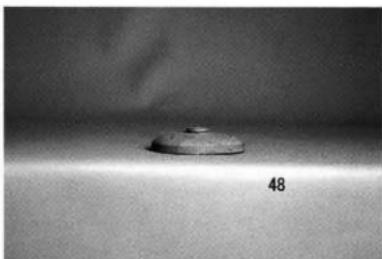
图版17 III层出土土器



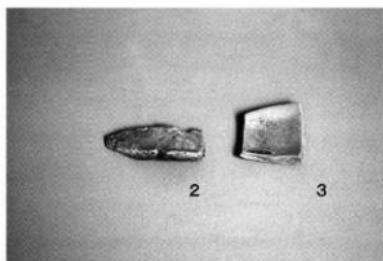
图版18 III层出土土器



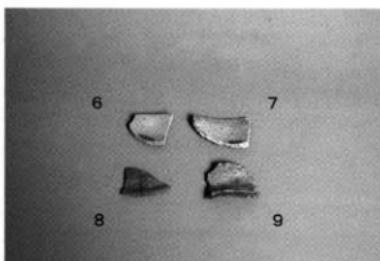
图版19 III层出土土器



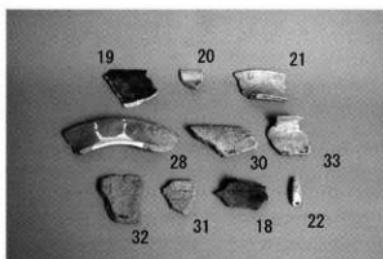
图版20 III层出土土器



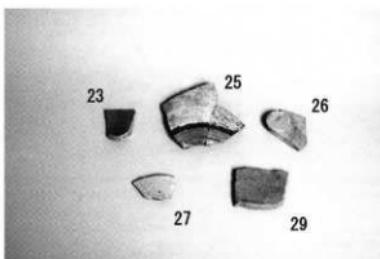
圖版21 2号竪穴住居跡(SA 2)出土土器



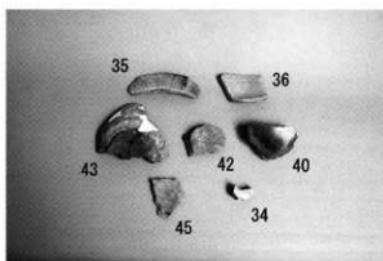
圖版22 3号竪穴住居跡(SA 3)出土土器



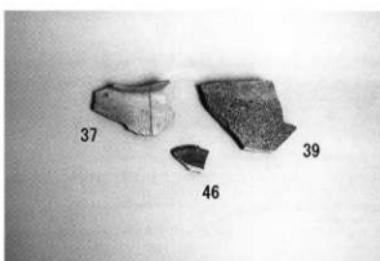
圖版23 II層出土土器



圖版24 II層出土土器



圖版25 III層出土土器



圖版26 III層出土土器

報告書抄録

ふりがな	かたせばるいせき							
書名	片瀬原遺跡							
副書名	特別養護老人ホーム「松晃園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第70集							
編著者名	河野 雅人							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 4F TEL (0985) 21-1836							
発行年月日	2008年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町村					
片瀬原遺跡	宮崎県							
	宮崎市							
	佐上原町	45201		32° 0' 5"付近	131° 27' 59"付近	20070604 ~ 20070622	60m ²	特別養護老人ホーム「松晃園」建設
	下那珂							
	字片瀬原							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物		特記事項		
片瀬原遺跡	集落	古代	竪穴住居跡 上坑溝状構造	須恵器 土師器	石崎川右岸で集落跡が確認された。また、3分竪穴住居は埋甕をともなっていた。			

宮崎市文化財調査報告書 第70集

片瀬原遺跡

特別養護老人ホーム「松見園」建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月

発行 宮崎市教育委員会